

◎座談会・国際スポーツイベントと都市の演出

■佐々木かをり・宮本亜門・森野美徳・高秀秀信

1 今なぜオリンピック開催立候補なのか

森野 本日は、横浜市がオリンピックに立候補したことを契機に、国際スポーツイベントと都市の演出というテーマで、みなさんにお話しただろうと思っています。

横浜市のオリンピック開催への立候補の話は、突然と言えば突然であったような感じが内外にあったと思うのですが、私のような立場の者から見ると、ゆめはまプランなどをつくった段階で、何となくこれが遠くに透けてみえた。それがある時期、熟して一斉に表面に出たということなのではないかと思っています。つまり、市長の構想の中には、かなり以前からオリンピックがあったのではないかと。広域開催にしても、比較的鮮やかに周辺都県との話をまとめて発表されたという流れを見ると、世間には、一見唐突とした印象を与えながら、実は、かなり着々と手を打ってきたのでは……という感があります。この辺のことも含めて、二〇〇八年オリンピックに対する

市長のねらいを聞かせてください。

高秀 オリンピックのねらいの一つ目は、ピースメッセンジャーとしての平和活動的要素です。横浜市は、国連から認定を受けているピースメッセンジャー都市の一つなのです。ですから、平和への世界貢献に、市民と一緒に取り組んでいきたいと、常日頃から、横浜市の一つの目標として持っているのです。オリンピックというのはスポーツの祭典であると同時に、まさに平和の祭典とも言えるわけです。世界の人々が集まって、スポーツという共通のテーマのもとに技を競い合う。そういうのはやっぱり平和でなければできないし、言葉や宗教といったあらゆる違いを超えて、お互いを理解し合うことにもつながるんですよ。別の側面から見れば、オリンピック開催は平和を世界全体が望んでいるとも言えると思います。ピースメッセンジャー都市としては、是非そうした平和の祭典に場を提供したい。そういうことも考え、この横浜でオリンピックを。

二点目に、市民にとっての意義です。オリ

ンピックは、まさに国際交流の場です。世界とふれあうことで、市民のみなさんの心の世界もぐっと広がると思います。また、横浜でオリンピックを開催することが、横浜市のスポーツ振興につながっていく。言葉を換えれば、若い人たちに夢と希望を持つような場をつくることになると思うのです。

全く別の視点もあります。ご承知のように横浜は、日本ではじめてというものが多いいです。世界に門戸を開いて、外国の人々がたくさんやって来た。それに伴って西洋の文化が横浜へたくさん入ってきたんですね。スポーツも日本に初めて入ってきたのは横浜が多い。ですから、野球でも、テニスでも何でも横浜に入って、それから、日本国内に広まっていった。スポーツに限らず、お芝居でも何でも、ここ（横浜）で一週咀嚼して日本になじんで、それから日本の国内に、文化として広がっていくという街だった。つまり、日本全国に向けて、外国文化を発信する基地だったわけです。

オリンピックには世界の人々が来るわけで、

1 今なぜオリンピック開催立候補なのか

2 1新しい形の横浜オリンピック提案

3 1横浜提案の具体性

4 1世界と日本の関係と二〇〇八年オリンピック

5 1横浜のメッセージの伝え方

スポーツだけでなく、そういう文化全般の発展にも寄与するイベントでもある。横浜の歴史的な歩みを考えても、ふさわしいイベントかなという思いもありました。

森野 なるほど、オリンピックに対する市長のねらいは、今のお話で浮かび上がってきた気がしますが、二〇〇八年に立候補するという決断は、どのような経過を経てされたのですか。

市長 まず、来年行われる神奈川県国体の存在があり、国体開催に向けて、いろいろなスポーツ施設を整備していくことになったのですが、これらをどういう規模のスポーツ施設にしていくかと考えたとき、これから横浜で整備していくのであれば、オリンピックを含めた国際大会クラスの開催が可能な規模のスポーツ施設にすべきだと思っただけです。

それと、二〇〇八年が横浜にとっては、開港百五十年にあたる年だということがありました。前にも述べたように、スポーツ発祥の地横浜の歴史的なこともあり、オリンピックがその記念行事には、今の段階では一番ふさわしいのではないかと。

森野 国体と開港百五十年が、二〇〇八年へのアプローチへつながったわけですね。将来を見通した施設整備計画と、歴史的な流れというコントラストが、印象的ですね。

佐々木さんは元々は「浜っ子」だそうです。現在は、東京に住んでおられて、東京を中心に仕事をなさっている。そういう方の目で、横浜のオリンピック立候補の話はどんな印象だったのでしょうか。テレビや新聞を通じて、どんどん入ってくる続報も含めて、やや

横浜から離れた日常生活を送っている立場から見て、どういう印象を受けていますか。

2 一新しい形の横浜オリンピック提案

佐々木 初めて、「横浜でオリンピック」という話を聞いた時には、正直言って余りピンとこなかったんです。私は何しろ浜っ子で、横浜を愛してますので（笑）、横浜とオリンピックがしっくり結びつかないんです。

オリンピックという何となくまだ注目を浴びていない、これから国際化を目指そうという都市がオリンピックということを契機にして、世界の注目を浴びたり、人を集めたり、街をつくっていったりするという、私の中にはそういうイメージがあったんです。多分アトランタぐらいからなのだと思いますが、「まちづくりとオリンピック」というイメージが非常に強く明示されていたので、横浜で開催しなくてもいいじゃないか。既に国際的な都市で、人もいつも集まってきたている街なんだから、必要ないんじゃないか。なぜやるんだらうというのが、最初の印象でした。

森野 その印象は今でも変わらないですか。佐々木 プランを読ませていただいて変わりました。これは新しいオリンピックのあり方を提唱する斬新な考え方なのではないか。さすがは横浜だな。半分ひいき目もあるんですが。（笑）今では、このプランを非常に気に入っていると、驚きから、期待というフレーズに変化したというところです。

森野 宮本さんは、横浜市のオリンピック・パラリンピック開催計画の策定に関する委員



佐々木 かをり

（株）ユニカルインターナショナル社長。
横浜出身。

フリーランスの通訳を経て、一九八七年国際コミュニケーションのコンサルティング会社「ユニカルインターナショナル」を設立。八九年には、プロ意識のある女性のネットワーク「NAPW」を設立し、代表となる。現在TBSテレビ「CBSドキュメント」キャスターでもあり、講演やセミナー、執筆活動と幅広く活躍中。著書に「妊婦だって働くよ」がある。

をお引き受けになっているわけですが、今回の立候補については、どうお考えになりますか。

宮本 私は、東京都民なんですけれども、東京から見てなぜ横浜かということをまず、考えました。なぜ横浜なんだろう。策定部会でも、当初横浜の魅力というものをお互い語り合つて、その後、なぜ横浜じゃなきゃならんんだらうという次の議論の段階に入っているようで、そういう議論の根底にあるのは、佐々木さんがおっしゃったとおり、今までとは違う形の目的をもつていくべきだということなのだと思ひます。

つまり、二〇〇八年のこのオリンピックがおもしろいのは、二十一世紀のオリンピックであるという点にあるということなんです。今までのオリンピックというのは民族意識の高揚であるとか、都市の発展のためにオリンピックを利用して、自分たちがどう変わっていくかというのが目的だったわけですから、二十一世紀は、二十世紀がある意味で犯してきた過ちを繰り返さないように進めなければいけない。と言うと少し大げさですが、同じように乱開発をして、それがいい形なのかと、時代に問われてきているということだと思ひます。

ということとは、今、どこで開催されるにしろ、バランスのとれた、受け入れ態勢ができてくる街での開催が意義を持つてくる。そして、広域開催を計画する、広範囲にわたつて競技場を展開していくというの、やはり新しい形のオリンピック提案といえるでしょう。オリンピックのあり方を示唆していこう

という大きな意味を持つことが大切なのです。佐々木 横浜で開催されるオリンピックは、従来のオリンピックと違うものになるでしょうね。地域がすべて負担をしながら、下手すると街が一つ破産してしまう、でも何か命かけてその市の名譽のためと宣伝のためにやるとしてあり方とは違つて、成熟した、大人として実力を持った都市がファシリテイトすると、こんなにフレキシビリティもあつて、余裕もあつて、街の人の負担も少なく、自然な形で楽しめるんだよということを提唱されようとしている気がします。今回の横浜市

の提案は奥が深い。宮本 従来方式では、オリンピックを開催すると、必ず後に問題が残るんですね。施設を使わなくなつたとか、自然が少なくなつたとか。そういう結果になつてしまふのではなくて、今までとは違う方法論が、必要視されているのではないかと思ひます。例えば、横浜港がきれいとは言えない状況ならば、オリンピックに向かつてきれいにしていくなか、一言で言えば、逆転の発想かな。オリンピックII開発じゃなくて、次の時代の新しい開発の方法、新しい発想が生まれないかなというのが、僕の個人的な期待ですね。

そうなる文化ということも当然結びつくし、オリンピックは、スポーツがメインテーマだけれど、すべてにおいてバランスが必要だということが見えてくる。バランスの中でオリンピックを考へていけば、横浜開催の意味につながっていくと思ひますね。

高秀 宮本さんや佐々木さんがおっしゃつたように、東京オリンピックのときはどちらか

と言へばそういう開発的な傾向が非常に強かつたわけですね。オリンピックをやるために一種の社会資本の整備を行つていこうと。

森野 東京オリンピックというのは、東京という街自体をかなり変えた一つのエポックだった。東京の街を明治以降変えたのは、今の官庁街計画、霞が関の計画と、関東大震災後の復興事業。震災復興事業はお金がなかつたこともあつて、結局駅前整備のなところにとどまつてしまつた。そして、オリンピックを契機に青山通りの拡幅であるとか、首都高速道路、もつと全国的には新幹線、高速道路網というものができて、インフラがある程度整つて、都市の枠組みも固まつた。代々木の米軍の宿舎跡地に選手村をつくり、そこが今代々木公園になつてゐるわけです。

つまり、東京全体を変えていく計画だった。札幌もそう、長野も北陸新幹線、上信越自動車道をオリンピックに合わせて整備している。あと三、四年、四、五年すると「前世紀の遺物」みたいに言われるようなインフラを今作つている。途上国型というか、発展途上段階でのパターンで進められている。これらのオリンピックと横浜の提案するオリンピックは明らかに違うものですね。

佐々木 提案の目指すところは、大分はつきりしてきましたが、もう一歩進んで、横浜のオリンピックが具体的にどうなるのかという点になると、まだよくわからないですよ。例えば、私自身、イメージされないので。例えば、カヌーはあちら、こちらではこれと、広域開催になつたときに、お客さまのアクセスがどうなるのか、街全体が本当にオリンピックの

宮本 亜門

演出家。

ロンドン、ニューヨークへ二年間留学の後、ミュージカル「アイ・ガット・マーマン」で演出家としてデビュー（文化庁芸術祭賞受賞）。その後、ミュージカルのみならず、ストリートプレイ、オペラ等、幅広く作品を発表。主な演出作品には「平成版狸御殿」「サウンド・オブ・ミュージック」「熱帯祝祭劇マウイ」などがある。

―本市オリンピック・パラリンピック開催概要計画策定部会委員。



イメージを強く持つためには、どんな仕掛けが必要なのかなど、知りたいことがたくさんあります。

ひとつとても印象的だったのはパラリンピックです。アトラクタの時もどこでも、オリンピックについては、何かすでに始まっているかのごとく、何年も前からいろいろな告知がありましたが、何年か前からはパラリンピックのことが余り書かれてなかったような気がしたので、今回、横浜の提案の中に「オリンピックとパラリンピックを二〇〇八年横浜で」と、同じ大きさで書いてあったことを、私はとても好意的に、ポジティブに受け止めたのですが。

3 横浜提案の具体性

①パラリンピックも同時開催

森野 ご指摘のとおり、提案内容の具体性については、みなさん、市長にたくさんお伺いしたいことがあると思うのですが、先ず初めに、佐々木さんが好意的に受け止めたというオリンピック、パラリンピックの並列という点について、高秀市長から。

高秀 市民感覚から言うと一緒にやっただけだと思わぬんですが、費用などの点で、なかなか難しいですね。ですから、オリンピックをどこで開催するかが決まりますと、その国でパラリンピックをオリンピックの後で開催するというのが、今までの一種の慣習となっていた。

ただし、同じ場所、同じ競技場という決まりがあるわけでもないですね。ソウル大会以降は大体同じ都市で開催されていますが、

それ以前は違う都市で開催されている。国は同じですけどね。

しかし、私も初めから、今、佐々木さんがおっしゃったように、パラリンピックとオリンピックは、この同じ横浜を中心に、同じ年に、同じ場所で行いましょうと提案した。これからの時代に向けて、障害のある方々も、健常な方々も一緒に手を携えていきましょうというメッセージです。しかも、できればパラリンピックをもっと、世界の人々に観てもらいたい。従来は、オリンピックが終わった後でやるものですから、そのときは放映施設がもう撤去されてしまう。だから、世界の人々にパラリンピックを伝えることが十分できない。そこで、横浜では、パラリンピックを先に開催するという計画を立てたのです。そうした開催時期の提案も含めて、横浜が初めてなんです。「オリンピック及びパラリンピック」というのは。

立候補の提出先も、オリンピックは文部省及びオリンピック国内委員会、パラリンピックは厚生省なんです。だから、私も立候補の意志表明を持っていったときに、オリンピックはこちらへ、パラリンピックはこちらへと持っていったわけですね。パラリンピック側はびっくりしていました。前例がないんです。受け取っていいんですかなんていう話が出たくらいです。(笑)

佐々木 素晴らしいです。垂れ幕とか、いろいろな所で「オリンピック・パラリンピック」という文字を見つる度に、ああ、とても、いいなって……

宮本 閉会式にパラリンピックの選手とオリ

ンピックの選手が一緒という流れが実現すれば、世界で初めての快挙になり得る。

高秀 もうひとつには、パラリンピックを開催する契機に、一種のバリアフリー的なまちづくりをしようと考えているんです。

世界中から障害を持った方々がたくさんみえるわけですから、その人たちが自由に街中を動けるような、何も世界の人だけじゃなくて、横浜市民に対してもそうなんですけれども、そういう意味のまちづくりの契機にしようと思っっています。

佐々木 観客の中に八十歳以上の高齢者の席を設けるとかというのも書いてありましたよね。とても、バランスのとれた感じがしますよ。今までの商業的とか、健康な人だけがスポーツを浴びるような、そういうオリンピックのあり方を変えていっているのが節々に見られて、多分一般の人はとても好感を持つんじゃないかなって思います。

② 既存施設の活用と広域開催

森野 横浜市の提案で非常に重要な特徴としてあげられる点に、既存施設の活用と広域開催がありますね。競技施設だけではなくて、鉄道や道路、そういうものも含めて施設と、そのためのネットワークによる広域的開催という方向がみえてくる。

高秀 オリンピックは都市が開催する、オリンピック憲章でもそういうような規定があるわけですけれども、広域開催を否定しているわけではなくて、広域開催も可能なような規定になつてゐるわけです。横浜が広域開催を打ち出した趣旨は、広く大勢の人々が参加する、

あるいは大勢の人々が観戦できるというのがこれからのオリンピックであろう、ということとです。その一つの手段として、情報通信があります、大勢の人々がオリンピックを直接体験するという形が、より望ましいであろうと考えました。

もう一つは、森野さんがおっしゃったように、既存施設を使っていくということになりますと、横浜だけでは…ということがありますから、広く皆さんと一緒にやりましょうと。

ヨーロッパにしても、アメリカにしても、そういう意味では、一種の社会資本的なもの、ストックができていますから、既存施設の活用はすでに行われているんですね。

ワールドカップで言えば、アメリカでも、そのためにサッカー場をつくるということではなくて、ロスアンジェルス決勝戦は、六十年前前にできたアメリカンフットボールの競技場を使つてゐるわけです。

そして、今日のオリンピックは、総合的な文化イベントという側面も持つていて、オリンピック開催の四年くらい前から、文化的行事をやりながら、最後がオリンピック、という流れになっています。そういう事前の文化的な行事みたいなものも、従来ので上がった施設を使ってやっていく。

では、日本はというと、残念ながらそういう面は、狭い意味の文化的な施設もないし、勢い、そういうものをつくりましようということになりますね。やむを得ないのかなあというふうには思いますが、しかし、できるだけ既存のを使つてやりましょう。しかも、横浜だけでなく、隣近所に声をかけて、という

のが既存施設の活用と広域開催ということとです。

宮本 演出という視点から見ると、事前イベントも含めて考えていくというのは、非常に重要なポイントだと思います。盛り上がりをつくっていく、機運を醸成するということは、イベント演出の大きな要素ですから。それを既存の施設を使って、広域開催で行っていくわけですよ。僕は太りに賛成です。

森野 既存施設の有効活用、今、いろいろ公共投資のあり方が盛んに言われている中で、いかに既にあるものを有効に活用しながら、少ない、とりわけ税金で賄う分を少なくしてやっていくかということが、このオリンピックの非常に大きな特徴なんじゃないかなと思います。既存施設の活用の例を横浜市内に絞つて、ご説明いただけますか。

高秀 例えば、国体用に水泳競技施設をつくつているのですけれども、平常時四千人の観客数を想定しています。オリンピックは一万ないし一万一千ですから、七千人分は仮設スタンドになります。普通に四千人分のスタンドをつくると、屋根が低いので、仮設スタンドの方はプールが見えないですね。ですから、みんなで知恵を絞つて、普通のプールよりは屋根を高く、プールを少し低くした。そして、両側の壁は外れるようになってゐるんです。国際級の大会でないときは、それを外して、また元通りに使う、そういう形で建設が進んでいます。

それから、総合競技場では、記者席なども工夫をしている。記者席は通常一千人分必要ですが、ワールドカップやオリンピックで



森野 美德

日本経済新聞記者（編集局地方部）。

鎌倉生まれ。

昭和五十三―五十五年、横浜市政記者会所

属。

昭和四十七年日本経済新聞社入社。大都市、

地方都市の都市政策、国土計画（環境、開発、

交通、産業、文化）を専門に活動。対象とする

分野は幅広く、地方行財政、地域経済から大

深度地下利用、市民活動等にまで及ぶ。

主な編著書に「シリーズ・地域の活力と魅力」

「地方の挑戦」―自治体の政策形成―（共著）

等がある。

は、二千五百人分ぐらい必要となるし、テレビのカメラというものも非常に多くなります。ですから、テレビボックスみたいな形にしないで、機材を自由に置けるようにした。さらに、方々に放送用の回線端末が設置されていて、場内から場外の中継車へ自由につなげる。伸縮自在な、あらゆる状況に対応できるようなものをつくっていく。初めから大きな設備をつくらない。通常はこうだけれども、場合によっては広がる、という方式で考えています。

森野 ワールドカップでも、国体でも使う総合メーキングラウンド。あの場所は、鶴見川の氾濫地域で、河川改修を進めた結果、今のような状態になっている。

スタジアムを新横浜駅から近いところに建設する、という単純な話ではないですよ。ね。本来の「洪水時の遊水池」という機能の上に、ああいう形で競技場をつくった。

そのように、市長の考える既存施設の有効活用というのは、もう一段奥の深いものが実はあるんだということなんですよ。

高秀 あの場所は、遊水池計画の方が先にあったんです。鶴見川が毎年氾濫していましたね。頻繁に水が入ったでしょう。できれば人工河川みたいなものをつくって、水を流そうというプランがあったのですが、横浜港まで勾配がないものだから、巨大なトンネルになってしまふ。それでは、遊水池計画で人工的に水を遊ばせようということになったんです。ある程度の規模の洪水が来たらこぼれさせて、下流への影響を少なくしよう。

そして、今おっしゃったように二段になった。上の段は、三十年に一回水が入る、下の

段は十年に一回という計算です。遊水池そのものは建設省が作りますが、上は全部公園にするわけです。それは市の方でやり、公園施設として、今おっしゃった競技場もつくっていく。

この競技場では、世界でも初めてでしょうけど、いわゆるトラックフィールドというのが、人工地盤の上にあるわけです。下は普段は駐車場に使う。まさに既存施設の有効利用です。

森野 個々の施設のつくり方も、イベントのときだけ使われるというんじゃないかと、例えば、治水上の対策としても使える。従って、財源がそういう視点からも確保ができる。これからの公共施設は、こうしてつくっていくんだという、一つの先行的な事例が、あのスタジアムに集約されているということです。どうでしょう。

佐々木 いいですよ。もつとPRすればいいなど。（笑）何か何うと、「へえ、ふーん」という感じですよ。私もいろいろな都市のまちづくりのお話を伺う機会がありますけれども、こんなにいい話を聞くことができるのは珍しいなど、今思っています。

宮本 既存の施設をいろいろなものに使うという方向で考えていけば、こんな使い方があらんんじゃないかというアイデアが、これから、どんどん出てくるような気がします。ね。逆に、オリンピック施設を、オリンピック以外にも使うとすると、こんな使い方があらんんじゃないかという発想もあるでしょう。

高秀 これは、宮本さんの領域ですが、アメリカでは、例えばワールドカップの前夜祭で、